会　　報

1981

No. 12

1981年1月　ヒマラヤ　タムセルク峰

KAC

神戸山岳会

目　　次

昭和 56年度　冬山月宿報告

序　　文 …… 山本泰彦 …… 1

合宿計画 …… 山本泰彦 …… 1

行動記録 …… 山本泰彦 …… 1

昭和 56年度　新年会報告 …… 3

昭和 56年度　総会報告 …… 3

地域研究　おらが村のゲレンデ …… 山内教史 …… 5

昭和 56年度　個人山行　八ケ岳，三叉峰ルンゼ …… 山本泰彦 …… 6

気分はメスナー?! …… 山内教史 …… 7

滑川本谷・中央稜 …… 山本泰彦 …… 8

前穂高北尾根～岳沢 …… 小林利樹 …… 10

ダイヤモンドコース …… 川辺秀司 …… 10

剣岳小窓尾根 …… 山内教史 …… 12

白川又川本流～奥剣又谷 …… 山内教史 …… 14

昭和 56年度　スキー山行　比良，武奈岳スキーツアー …… 幸内義孝 …… 15

氷ノ山スキーツアー（大段平コース） 小林利樹 …… 16

伊吹山スキーツアー …… 小林利樹 …… 16

白馬岳スキーツアー …… 小林利樹 …… 17

昭和 56年度　例会報告（1月～6月） …… 18

名色・蘇武岳スキーツアー …… 幸内義孝 …… 19

妙見～蘇武岳スキーツアー …… 川辺秀司 …… 19

西多紀アルプス …… 木村寅次郎 …… 20

昭和 55年度　個人山行　氷ノ山，千谷（積雪期） …… 米沢典之 …… 21

屏風岩 …… 小林利樹 …… 23

会員動静 …… 26

編集後記 …… 26

昭和56年度 冬山合宿報告

山本泰彦

序　　文

今年度の冬山合宿は、剱岳・早月尾根を目的とし、トレーニングに励んだ。

しかし、不幸なことに　豪雪のため　北陸本線が不通になり、本計画は　放棄せざるを得なくなった。そこで12月30日、参加者全員で協議の結果、遭難の危険性の少ない3000m級の山ということで　塩見岳が選ばれた。

幸い天候にも恵まれ、冬山を楽しむといった山行であった。それ故、積雪期登攀技術の向上という点には、不満も残った。それは、今後の個人山行で昇華してもらいたい。そして　来年こそは　冬の剱岳頂上に立とうではないか!!

合　宿　計　画

登山地：塩見岳

目　的：積雪期登攀技術の向上

行動予定：昭和55年12月30日～昭和56年1月5日

12月30日	神戸 — 伊那大島 — 沢井
12月31日	沢井 — 塩川小屋 — 三伏峠
1月1日	三伏峠 — 本谷山 — 塩見岳 — 本谷山 — 三伏峠
1月2日	三伏峠 — 塩川小屋 — 鹿塩 — 伊那大島 — 神戸
1月3日	予備日
1月4日	予備日
1月5日	予備日

パーティ：星野（L）　山本（食料，記録，医療）、堀田（装備，気象）、山内（食料）、岸本（O.B）

行　動　記　録

12月31日（快晴）　沢井（8：00）—塩川小屋（9：20）—尾根取付（10：30）—三伏峠（14：25）

前日に三ノ宮の「エリーゼ」で、協議し、塩見岳に決定し、登山届を前田会長に提出する。タクシーをとばして帰宅するも、新大阪16：02発の新幹線に間に合うためには、あと30分しか

ない。剱岳の装備からガソリン２ℓを抜くのが精一杯。豊橋から伊那大島行きの最終列車に乗り、何と４時間 40分も鈍行列車の客となる。親切な車掌がいて、停車時間を利用し、田舎の駅前の食堂からビールを調達して、ほっと一息。伊那大島駅からは予約しておいたタクシーで、沢井まではいる。丁度真夜中で、大空一杯に星がきらめいている。

今日は三伏峠までの予定故、のんびりと出発。塩川に沿った道を進む。三伏峠から北西に派生した尾根に取付くと急登にはなるが、径のつけ方が良いので楽である。しかも径はきれいにトレースされており、三伏峠まで　とうとうスパッツもつけなかった。峠から烏帽子岳寄りに少し下ると南アルプス南部の山々が望まれる。

１月１日（快晴）　三伏峠（６：００）　塩見小屋（８：４５～８：５５）　塩見岳（１０：００～１０：１５）　塩見小屋（１０：４５）　三伏峠（１３：４０）

三伏山と本谷山との鞍部で、富士山の右肩からの御来迎を拝む。「今年も遭難せずに山へ行けますように。」 本谷山の下りで　アイゼンのジョイントが折れる。（門田 10本爪）そこは手慣れたもの。細引でくるくる縛ってさあ出発。

本谷山から権右衛門山のトラバースにかかるまでが　以外と長い。前に来た時は、すぐいけたと思ったのに??　塩見小屋で１本たてる。仙丈岳が、鋭角的な姿をみせている。夏道通り、天狗岩の右を横切り、本峰への登りにかかる。無風状態なので　とても暑い。一ケ所だけ岩を摑んだが、ザイルを使うこともなかった。ブラブラ歩いていると、風がきつくなった。なんと、そこが頂上であった。ピッケルで三角点を掘りだし、日光浴をさせてやる。ブドウ酒を飲み、360度の大パノラマに満足する。まさか、北アルプスまでみえるとは思いもよらなかった。あとはテントに帰るだけ。長い休憩を何回もとり、のんびりと往路を戻る。靴に付着した雪が、融けて水滴になっている。これでも冬山か??　でも油断は禁物。この頃、目前の悪沢岳で滑落死しているのだから。

何しろ、剱岳用の食料を全部持ってきているのだから、食べきれない。しかもウイスキーは４ℓ、昨日１ℓしか飲んでいないので、まだ３ℓある。これをすっかり飲みおえると　夜中の 12時であった。

１月２日（小雪のち曇）　三伏峠（１２：００）―尾根取付点（１３：００）―塩川小屋（13：45～１４：００）―沢井（１４：４０～１５：００）―鹿塩温泉（１５：３０）

太陽がでてから　起床の予定なるも、暁方からミゾレ。昼前に小雪に変ったので徹収。三伏峠よ、サヨウナラ。急坂を一気に駆け下り、鹿塩の温泉にとびこむ。海水よりも、塩辛い鉱泉である。やはり、冬は温泉に限る？

「まあ、これも一つの山だよ」という岸本さんの言葉が　ぴったりでした。

昭和56年度 新年会報告

昭和56年度の新年会は下記のように行われました。

日　時　　1月11日　午後1時より

場　所　　研修所2階　会議室

参加者　　28名（敬称略　順不同）

前田　浩，　木村寅次郎，　島田　文雄，　新川　利夫，　川本　勉，
大樫　正之，　岡崎　群治，　岡田　政一，　岸本　光弘，　片山　英一，
丸屋　信雄，　武田　禎，　田中　享三，　土居　健次，　藤本　貞民，
内藤　正司，　星加　弘之，　矢木　研三，　星野　辰也，　幸内　義孝，
神田　章吉，　川辺　秀司，　小林　利樹，　山本　泰彦，　堀田　久，
三原鍛治律樹，萩本維都子，　国沢　昭美

大樫，土居，神田の各氏によるスライド映写が行われました。

昭和56年度　総会報告

去る5月10日、登山研修所において総会が行われ、下記事項が決定しました。

出席者　　20名（敬称略　順不同）

前田　浩，　大樫　正之，　岸本　光弘，　田中　享三，　野上　芳宏，
星加　弘之，　内藤　正司，　武田　禎，　堀野　和子，　幸内　義孝，
矢木　研三，　神田　章吉，　小林　利樹，　川辺　秀司，　山本　泰彦，
堀田　久，　山内　教史，　萩本維都子，　国沢　昭美，　米沢　典之

新役員

委員長　　内藤

副委員長　　星野

運営委員

企画　　星野，　矢木，　川辺，　小林，　山本

装備　　矢木，　堀田，　山内

会報　　堀田，　国沢，　山本

庶務　　萩本，　山内

会計　　萩本，　山内

リーダー会　　（L）星野，　小林，　川辺，　山本

兵岳連の新役員

理　事　　岸本

評議員　　武田，　山本

技　術　　小林

遭　対　　川辺

海　外　　堀田

会則の変更

昭和 56年6月より　会費 350円を 500円に改め、入会金を 1,000円とする。

装備収納用プレハブ倉庫の購入

岸本宅敷地内に新築し、会の全ての装備を置くこととする。

登山届に関して

(1)　原則として全山行に登山届の提出をする。

(2)　登山届の提出先

地元警察署，地元警察本部外勤課，兵庫県警本部，兵岳連，KAC留守本部(前田氏宅)

「但馬をめぐる山々」の改訂版発行に関して

山本氏が編集を担当する。踏査は現役中心で行い、山本氏，新委員長に一任する。

委員会と集会の一元化

毎月第1水曜のみとする。

新会員の承任

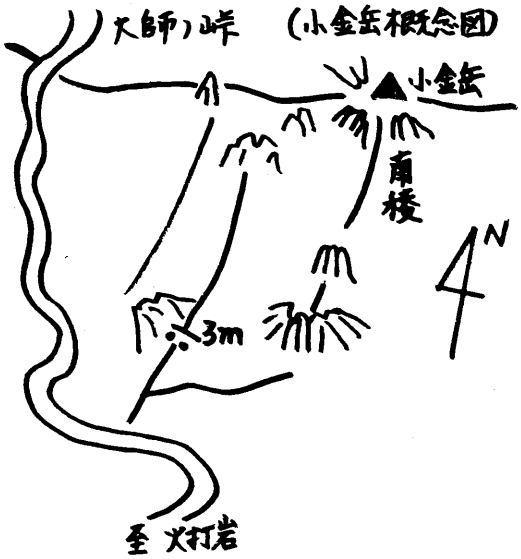
米沢典之氏を復活会員として承認。会員番号（　　）

地　域　研　究

おらが村のゲレンデ（篠山，小金岳）

山内教史

東多紀アルプスの山々の一つである小金岳は、僕の一番好きな山である。今でも、家に帰ると時々遊びに行く。今回は、岩登りのできる所はないかと、数回歩いたので簡単に報告する。



最初に歩いたのは南稜で岩登りというよりも尾根歩きといったルートである。取付は南稜末端の岩壁の一番左のリッジから取付く。一ケ所ハング下の岩壁のトラバースがいやらしい壁の頭に出ると後は尾根を歩くだけである。

2月13日（くもり）　林道（9：30）小金岳頂上（10：50）

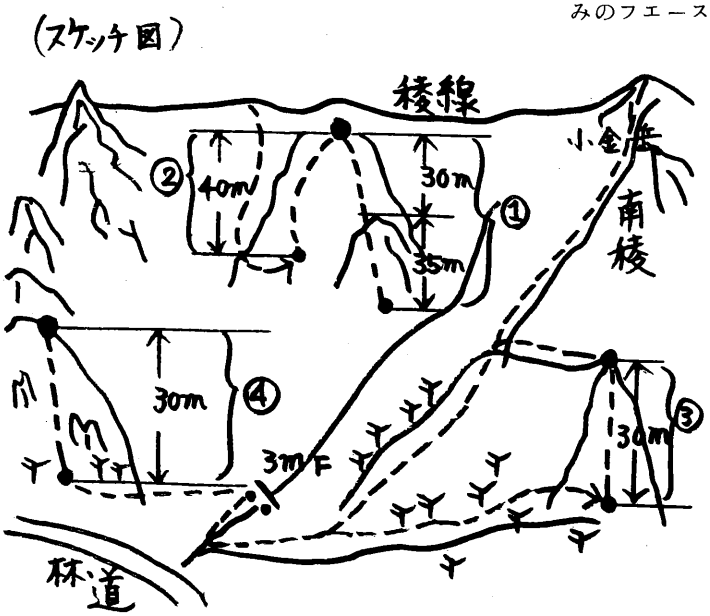
登ったルートとしては、スケッチ図に示す4ルートである。

①ルート　Ⅲ　35ｍ，30ｍの2ピッチ　3月22日

②ルート　Ⅲ＋　40ｍでもろいかぶりぎみのフエースが悪い。3月22日

③ルート　Ⅲ－A1　30ｍ　4月17日

④ルート　Ⅲ　30ｍ　4月17日



以上であるが、どのルートも短く、簡単である。僕の感想としては芦屋のロックガーデンみたいな感じだと思う。ひまつぶしに登ったので、少ししか登れなかったが、これからもひまつぶしに他のルートも登りたいと思っている。

昭和56年度 個人山行

八ケ岳・三叉峰ルンゼ

山本泰彦

昭和56年1月23日～26日　　パーティ：山本，山内

右手にアイスハンマー、左手にピッケルを持ち、アイゼンのツアッケをきかせて、ブルーアイスの氷瀑を登攀する　今、流行のアイスクライミングをせんものと、八ケ岳の三叉峰ルンゼに挑戦してみた。

1月24日（雪）、大阪（前夜）―茅野 ― 美濃戸口（7：50）― 美濃戸（8：40～9：00）― 赤岳鉱泉（11：00）―B.P.（11：20）

小雪が舞い、阿弥陀岳がうっすらとみえる。気温が相当下っているのであろう、鉱泉の1ピッチ手前で　辛抱できずに　手袋をつける。視界50m。

中山峠手前にベースを張り、三叉峰ルンゼの偵察に行く。吹雪になり　視界わずか10m!! うっすらとトレールがあり、誤って小同心沢にはいる。そのままつめて小同心の基部へ。この付近は　今にも雪崩れそうである。引き返して　三叉峰ルンゼへ。滝が埋まって壁になっている所を　急登すると、沢は扇形の岩壁の中に一条の氷瀑をかけている。ここが取付F1である。上から　さらさらと　ちり雪崩が落ちてくる。

1月25日（雪のち晴）

前線を伴った低気圧が　太平洋岸沿いに通過したため　湿雪が　しんしんと降る。夜中に2回も僕が除雪にでる始末。この雪であのルンゼを登るのは　自殺行為。沈澱に決定。

10時頃から　天気は回復し、青空が拡がる。雪化粧した大同心、小同心が美しい。特に小同心クラックは登攀意欲をそそる。来年は、あのクラックを登ろう!!

1月26日（曇）　B.P.（5：00）―取付F1（6：40）―二股（9：20）―縦走路（11：40～50）―赤岳分岐（12：35）―行者小屋（13：10）―B.P.（13：25～14：15）―美濃戸（15：15～15：40）―美濃戸口（16：10）―茅野 ― 神戸

一昨日につけたトレールは、全く埋れてしまい、膝から腰までのラッセルとなる。取付までに一昨日の3倍も時間がかかる。新雪の上に点々と茶色の物や　小さなデブリもある。沈澱して正解。取付F1でザイルをつけ、いよいよ登攀開始。有馬の滝ではきかなかったイボ型アイスハー

ケンが　小気味良く　喰い込む。「山本さん、アンゼンが　あんまりつきさっていませんよ。」と山内君が　下からどなる。「今、微妙な所だ。氷が固いから喰いこんでいないだけだ!!」と僕。氷に打込んだピッケルを摑んで　やっとの思いで登りきると、上部は雪壁になっている。昨日の雪が　落着いておらず、膝までもぐり、おまけに足許が　不安定である。滝を登りきったはずなのに　ザイルがどんどん延びるので　「山本さん、まだビレイできませんか。」　と何回も山内君がコールする。35mで岩角がでており、そこの残置ハーケンでビレイする。次の幅3mほどの喉部は、コンテで1ピッチ。ブルーに輝くF2の垂滝は　山内君が「落ちそう」といいながら、頑張って攀る。その上部のやや傾斜のゆるいブルーアイス化した3個の滝は、いずれも　アイゼン、ピッケルともききが悪く、思わず　ヘッピリ腰になる。F1から4ピッチで、柳川南沢が俯瞰できる二股に達する。核心部は終った！　「まあ、手頃といった所、もう少しむつかしい方がよいなあ。」　と感想を述べあう。

右股にすぐ氷瀑があったので　それを登ることにする。この滝は　ピッケル、アイゼンともききが良く、非常に快適。この上にも小滝があり、氷瀑はこれでおしまい。「あとはダラダラとつめれば稜線かなあ。」と思いきや、ここからが地獄の一丁目。膝までのラッセルが続きうんざり。おまけに視界も悪くなり30mほど。このルンゼは岩壁帯に消えてしまう。簡単にみえた凹角を登るが、やや渋い。草付まじりの外傾したアンサウンドロックに　新雪が付着して　かなりいやらしくなっている所を　4ピッチ進むと稜線上の縦走路にでる。縦走路はいい。霧のなかとはいえ、本当に楽だ。ザイルをしまうのも面倒なので、そのまま　コンテで　ブラブラ歩く。

予定より一日延びているので、一刻も早く岸本さんに　連絡せねばならない。そこで　赤岳は割愛して　行者小屋へ下る。中山峠から見る三叉峰ルンゼは、白い一条の垂滝にみえ、なかなか壮観である。中山尾根は　黒々とした上下2個の岩壁を持ち、これもなかなか　魅力的。また足を運ぶことになりそう。

美濃戸口で　岸本さんに電話を入れる。「朝から　心配で仕事が手につかなかった。」とのこと。どうもすみません。おかげで　僕達は　楽しい思いをしてきました。

氷瀑登攀の次のステップとして　次は、甲斐駒ケ岳の黄蓮谷へ行こう!!

気分はメスナー?!

山内教史

八ケ岳・三叉峰ルンゼ（1月23日～26日）

B.Cを出て取付の滝についたらもう夜は明けて明るくなっていました。さあいよいよこれから憬れの〝アイスクライミング〟ができるのです。それも1月の八ケ岳で、この日のためにといったら少々大げさですが、有り金をはたいて、1,800円もの本を買い、アイスハンマーを買ったの

です。トレーニングも有馬の滝でしました。

1ピッチ目は　山本さんがトップで登ります。傾斜はあまりないのですが　氷の状態が悪いようで苦戦しています。やっとアイスハーケンを打ち　ランニングビレーをとることができました。これで一安心です。こんな具合で2ピッチ、3ピッチとつるべで登って行きました。この時僕が思ったのは、ビレーしている時が非常につらいのです。とにかく寒いのです。初めの5分くらいはなんともないのですが、10分くらいたってくるとだんだん寒さが体にしみてきて、イライラしてきます。そしてパートナーに「おそいなあー　もっと早く登ってくれー。」と思ったりしているのです。おそらく山本さんも　僕をビレーしながら同じ様なことを思っていたと思います。

そして　二俣について山本さんが「行動食を食べようか？」と言ったのですが、早く稜線に出たかった僕は登攀続行を主張しました。今から思えば　まだ時間も十分あったのですが、未熟者の僕は非常に焦っていたのでした。

それから一つの滝を終えるとやっと稜線が見えました。しかしまだまだ遠くです。そしてこれから膝までのラッセルが続き、やっとラッセルが終わったと思ったら今度は岩峰に行手をはばまれ　僕がトップで取付いたのですが　これが案外むづかしく　ピッケルのブレードでエビのしっぽを落としながらの必死の登攀です。3ピッチぐらいこんな風に登ったら稜線でした。

風の吹き荒れる横岳の稜線で山本さんをビレーするために　寒さでかじかんだ手でハーケンを打とうとして自分の手をハンマーで打ったりしながら　このルートを登ったということで　自分が急にベテランになったみたいな錯覚に陥り、その時僕は、あの超人メスナーになったような気分だったのです。

今でも、アイスハンマーを氷に打ちこんでいる自分の写真を見ると、ニヤニヤしながら酒を飲み、やはり気分はメスナーなんです。

滑川本谷・中央稜

山　本　泰　彦

昭和56年3月27日～29日　　パーティ：山本，堀田，山内

山内君が　2年前から憧れていたという宝剣岳西面の滑川中央稜へ　5月の劔岳の足慣らしを兼ねて行くことにした。中央稜は　高距　800m、宝剣沢・本岳沢出合から　天狗山荘前の広場に突きあげており、P1，P3，P6の顕著な岩峰を持っている。

3月28日（晴）　大阪（前夜）―木曽福島―上松道2合目（6：00）―敬神ノ滝小屋（6：40）―滑川本谷（7：25）―中央稜取付点（13：00～13：40）―P1左稜線（15：30）―P1（17：30）―P2（18：30）

3月1日にスキーで痛めた僕の右膝内靱帯の回復は遅く、どうにか曲げられるようになったの

は　出発の前々日であった。山行できる状態ではないのだが、「荷物は持ちますから。」というやさしい言葉につられて、ついふらふらと「ちくま」の乗客になっていた。

敬神ノ滝小屋から５分で　左へ山腹をトラバースし、再び滑川本谷へ入る。このトラバースで右足を雪にとられると　膝に電気が走ったような疼痛で　涙がでてくる。しかし、本谷奥に　中央稜を始めとする宝剣岳西面の岩稜をみていると、山に対する闘志が　わいてきた。

ゴーロ状の河原は、すぐに雪原となる。奥三ノ沢の氷瀑とデブリを　右にみる頃から、川は両岸とも狭まり、谷らしくなる。前岳沢出合直前で　スノーブリッジが落ちており、左岸を高捲きする。デブリの上を歩いていると、目前に　中央稜Ｐ１の〝く〟の字ルンゼがみえてくる。登攀準備をし、宝剣沢に３０ｍ寄った所から、ルンゼにはいる。ルンゼは　雪のつまった緩傾斜故、ピエ・アン・カナールで登る。１０ｍの氷瀑は　氷も薄く、適当なビレー点もないので、直登は断念し、左側の脆い岩を登る。左へ回りこみ、腐った雪のついた　ゆるいガリーを５０ｍつめると　Ｐ１の左稜線上にでる。

Ｐ１の手前８０ｍで、わずかの距離であるが、垂直に近い個所がある。上でしっかりビレイしてくれていることをいいことに、横着して　ワカンをはいたまま登ると　氷でツルリとすべる。Ｐ１の頭から　ナイフリッジを下り、Ｐ２直下で幕営。両側とも切れているため、アルコールクラブの諸君も　用心して　アルコールはちっとも減らない。空は満天の星。気味の悪いほど無風。

３月２９日（快晴）　Ｐ２（５：３０）―Ｐ３の頭（７：３０）―稜線（９：１５～９：４５）―木曽駒ケ岳（１０：１５～１０：２５）―敬神ノ滝小屋（１４：５０～１５：０５）―２合目（１５：３０）

Ｐ２からＰ３へは　雪稜を　ピエ・ア・プラで登る。岩峰基部から　本岳沢側の凹状部の雪壁を４０ｍ登る。このピッチは　ダブル・アックスで登るには、やゝゆるいものの、足許に　本岳沢を望み、中央稜のルート中、最も快適である。２ピッチ、トラバースしてＰ３の頭へ。眼下に延々と滑川本谷が望まれる。Ｐ３とＰ４とのコルは顕著で　４０ｍコンテで下る。宝剣沢側に雪庇が発達していて、ふみぬきそうになる。ここからは雪稜で　Ｐ４，Ｐ５を知らぬ間に過ぎる。Ｐ６は岩峰で　４０ｍ宝剣沢へ下った凹角を抜けると、そこは縦走路のある天狗荘前の広場であった。

本山行には、星野君の記録（昭和５６年３月　月報No.８２）が大変参考になった。末筆ながら、感謝の意を表す。

前穂高北尾根～岳沢

小　林　利　樹

4月10日～4月13日　　パーティ：川辺，小林

4月10日、いつものように「ちくま号」に乗り込む。今回は時期的にはずれているため人数も少ない。松本駅でタクシーで行こうかと思うが何分にも人がいないため電車で新島々まで入りここからバスで沢渡まで入る。沢渡からは長い道のりを上高地めざして歩く。中ノ湯までは除雪がしてあるが釜トンネル以後はデブリの上を歩く。上高地で昼食をとり一路明神館へと行く。明神館を少し行った所から河原におり新村橋まで行く。今日は風邪のため大変しんどく時間がかかってしまう。奥又で本日の行動は終了。

4月12日　この奥又は上部からの雪崩でデブリがもの凄い。八峰まではただひたすら急傾斜の所をゆく。七峰はからみぎみにトラバースをする。雪がくさってきているので歩きずらい。5,6のコルからは奥又白の池へ行ける踏み替え点でもある。ここでも雪壁があるがまだ急ではない。5,6のコルでアンザイレンをする。4峰の登りにフィックスが張ってあるがほとんど雪の中である。稜線もナイフエッジになっており雪もくさっているので気を使う所である。3峰はアイゼンでの岩登りだけれどもホールドやスタンスが雪の中に埋まっているので探しながら登る。ここをすぎるとラッセルも以前より深くなってくる。頂上で握手をして岳沢へおりる。

4月13日　昨日夜半から降雪あり。風も強い。ツエルトが雪で半分近く埋まっていた。奥明神沢を下り岳沢におりる。風邪で大分しんどく　川辺さんに苦労をかける。河童橋で水を飲み長い上高地街道をおりる。途中から雨が降ってきた。沢渡でそばを食べ帰りのバスにのる。

ダイヤモンドコース（槍ケ岳～立山）

川　辺　秀　司

昭和56年5月1日～5日　　パーティ：（吉田）　小林，川辺

5月2日　　新穂高温泉 ― 槍平 ― 千丈沢乗越

朝、前夜大阪から夜行で来られた吉田さんと合流して　新穂高温泉を出発する。ここ数日続いた好天も、今日あるいは明日頃にはくずれそうな天気予報だが　現在は快晴である。槍平から、スキーをはき登高する。

吉田さんは夜行疲れのため苦しそうだが、私達は前夜と前々夜旅館に泊まり、少しカゼ気味ではあるが休養十分のため快調である。申し訳ないような気がしてくる。

飛驒沢の急登を　スキーでジグザグに登りながら、暑くて　千丈沢乗越に着いたら　肩の小屋にビールを買いに行こうと思いながら登る。

スキーで登れる所まで登り　後はつぼ足で登る。直登した所が千丈沢乗越だった。ビールは、日没までに帰れそうもないので中止にした。残念だ。

5月2日　　千丈沢乗越 ― 双六岳 ― 三俣蓮華岳 ― 黒部五郎小舎

西鎌尾根は雪がしまっていて歩き易いが、時々トラバース中にスキーが岩に当たり、気を使う。よく、冬から夏への衣がえ中のアベックの雷鳥を見かけた。

双六岳の山腹をトラバースしている時に、2人連れがかなりのハイペースで追いつき、片足のスキーを持ち上げて「コレ張り付けシール、バーンもいけちゃうよ」だと。

確かに、シールとシールが密着するためエッジングが出来、下りだけではなく　登行も楽に出来るようだ。新しくシールを買われる方は、多少値がはりますがこのシールの方が使い易いと思います。

三俣蓮華岳から　下りは本日のコースのハイライトだった。広い斜面で　傾斜も結構あり、豪快に滑降出来た。滑り終わった所が黒部五郎小舎。

ただし、視界の悪い時には方角に充分注意すべきだろう。

5月3日

黒部五郎小舎　　停　滞

5月4日

黒部五郎小舎 ― 上ノ岳 ― 太郎平 ― 薬師岳 ― スゴ小屋

今日は行程が長いので　朝早く出発する。

黒部五郎岳の斜面も　スキー滑降には最適のようだが、残念ながら我々には登りである。黒部五郎岳の頂上でスキーを付け、バーンになったところをユックリと滑っていたが、ナゼかコケてしまい、そのはずみでアラッと言うまに片方のスキーが、足から　サヨウナラをしてかなりの斜面を直滑降していった。

マッ青である。幸いにも途中で止まっていて良かったが、もっと下まで流れていたら　泣きの涙である。

プレート式のビンディングは、着脱やセーフティ機構は良いようだが、プレートから　くつがハズレやすいのが　大きな欠点である。

本日のハイライトは、上ノ山からの太郎小屋めがけての滑降であり、長く緩やかな斜面を　気分爽快に滑る。

この後、薬師岳の稜線を歩き、スゴ小屋手前の樹林帯でテントを設営する。

5月5日

スゴ小屋 ― 越中沢岳 ― 五色ケ原 ― 室堂

テント出発後、スゴ乗越あたりで一人のスキーヤーと遭遇、前々日に薬師岳から　滑降中にガスにまかれ迷い、2日間さまよっていたとのこと。それで、前日から　ヘリコプターが飛び回っていたのだ。小林さんに　室堂まで　先に連絡にいってもらい、暖い飲みものと少し休養した後ともかく　五色ケ原までいくつもりで出発する。2日間　さまよっていた割には元気なようで、吉田さんの説明で周囲の山々をながめながら　ノンビリ歩く。

その間、小林さんがかなりのハイペースで室堂まで走ってもらったおかげで、我々が五色ケ原に着くと同時に、ヘリコプターの爆音が背後から聞こえてきた。（小林さん、ゴクロウサンでした。）結局、我々もここから室堂までヘリコプターに乗ってしまい、最後の立山連山に行けなかったが、始めてのアルプスでのスキーツアーを満喫でき、生まれて始めてヘリコプターにも乗れ楽しい山行だった。

剣岳小窓尾根

山内教史

昭和56年5月2日～5日　　メンバー：山本，岸本，山内

5月2日（晴）　大熊谷橋（6：40）―馬場島（8：00）

一人、大熊橋で車からおりる。今日は馬場島までなのでのんびり行くことにする。道路のまわりには雪が残っている。馬場島発電所の手前で道がくずれていた。くずれた所を歩く。

馬場島に入ると山本さんと感激の再会である。祝盃をあげて酔いつぶれる。

5月3日（くもりのち雨）

馬場島出発（9：00）―小窓尾根（12：55）―テント場（13：30）

岸本さんと合流して出発する。取入口で1本立てる。取入口からえん堤を越すと京大の遺体捜索隊のテントが張ってある。今年は雪が多いので徒渉はしなくてよさそうである。しばらく行くとゴルジュの入口につく。僕達は夏道からでなく、このゴルジュから登ることにする。ゴルジュをゆっくり登って行くとガスがわいてきた。どうも雨がふりそうである。右へカーブしながら登ってから又左へカーブしながら登って行くと途中で雨が降り出す。雨具を着る。やがてゴルジュも広くなりそろそろ1600メートル地点への取付きであるはずである。ザックをデポして、山本さんと僕とで偵察に出る。山本さんが左上トラバースしているトレースを見つける。ザックを背

負ってそのトレースをたどる。しばらく左上しながらトラバースしルンゼ状の雪面を直上する。途中で右の灌木帯へ移りまた雪面へもどり、直上して行くと小窓尾根の稜線である。稜線には今までよりも、しっかりしたトレースがついており、1600メートル地点よりも上部にいることがわかった。しばらく登って行き、平らな所にテントを張る。

雨は降っており、テントに入って酒を飲むとやっと人心地がつく。阪神負ける。

5月4日（くもり）　テント場出発（5：00）―2121メートルピーク（6：20）―ドームの頭（8：35）　出発（8：50）―マッチ箱のピーク（10：45）―三ノ窓（13：00）

朝起きると　雨はあがっていた。早々にテントをたたみ出発する。赤谷尾根もよく見える。最初はキックステップで登っていくが途中でアイゼンを着ける。2121メートルのピークには2パーティがいた。もうニードルへの雪壁を登っているパーティもいる。雪壁はバケツが掘ってありノーザイルで登ることができる。ニードルの手前の稜線でザイルを結び、ニードルの頭はフイックスロープをたどりながら右へ巻く。次のドームも左の雪壁を登り、ドームの頭に出ると正面には、マッチ箱のピークが見える。マッチ箱への登りは、やせ尾根を歩き右の雪壁を登る。途中でザイルを解き、1本立てる。風が強いので、岩陰に身を隠す。行動食を食べ、ワンパターンの雪壁を登り、ピークに出るとマッチ箱のピークである。マッチ箱のピークからは、右に剣尾根、左に大窓が見え、迫力のある展望である。ここまでが核心部で、あとは二，三の登り下りをくり返し、小窓の王の基部を三ノ窓へトラバースする。このトラバースは急斜面を降りて行くので緊張する。チンネ左稜線には、数えきれないくらい人が登っていて、びっくりする。

5月5日（晴）　三ノ窓出発（5：40）―剣岳本峰（7：00）―伝蔵小屋（9：00）―馬場島（12：00）

昨夜寒かったので　起きてみるとすばらしい晴天である。池ノ谷ガリーは夏とちがい、大変登りやすい。本峰までも、雪稜を快適に歩くことができる。早月尾根の下りは、やはりシシ頭の下降に神経を使う。氷が張っていて、悪い。森林限界付近に伝蔵小屋が見える。すぐに小屋に降りられそうに感じるが、以外に時間がかかる。今年の正月に計画していた、早月尾根の計画ではアタックは伝蔵小屋からだったと思うが、相当強行軍ではないかと思う。A.Cをもう少し上げたら大分楽だと思う。そんなことを山本さん達と話しながら伝蔵小屋に降りる。小屋の横の雪洞で岸本さんが神戸から持って来たスシをいただく。　―

小屋からは樹林の中を下降して行く。途中で岸本さんがアイゼンを外しているのを見て、僕も外す。これが悲劇の始まりで、スリップの連続で馬場島に着いた時は足がガクガクふるえて、大変体力を消耗してしまったのでした。

白川又川本流～奥剣又谷

山　内　教　史

昭和 56年5月 23日～ 24日　　メンバー　　星野，山本，山内

5月 23日（晴）　車デポ地（5：20）　大栂山取付（6：00）　稜線（6：45）　フジトコ（7：20～7：40）　中ノ又谷出合（8：25）　火吹谷出合（9：30）　大滝手前（10：10）―水晶谷出合（12：00）　口剣又谷出合（13：40）　テント場（14：10）

22日の夜、小谷林道へ自動車で入り、一つ目の橋を少し登った所で車をデポし、そこでテントを張る。朝　起きると　まだ寒い感じがする。林道を小谷川にそって歩いていくと小谷川を渡る橋を渡る。そこからは、ジグザグにカーブした林道を登っていくと、左手に〝白川又川〟と書かれた看板があり、そこから登山道に入る。植林の中を登って行くと稜線に出る。稜線からは白川又川側をトラバースぎみに下ると小屋が二軒あり、なお下っていくと白川又川を渡る吊橋があり、それを渡るとフジトコである。（ここにも小屋が二軒ある。）そこで、ワラジと登攀用具をつける。始めは流れの浅い所を選んで歩いていたのだが大きい渕が出てくる。へつるのも無理みたいだ。山本さんは、平気な顔でザブザブと腰までつかりながら川に入っていく。しかたがないので僕もそれに続く。非常につめたい。そんな具合で次の大きな渕も腰までつかりながら溯上して行くと中ノ又谷の出合である。水流の斜瀑を左岸から巻いていくと滝の上に出る。次の5ｍの滝も右岸の岩壁を登り巻く。それからも滝の弱点をつきながら高巻をくり返して行くと火吹谷の出合につく。なおも溯上していくと大きい釜があり、その上に巨岩が行手をはばむ。腰までつかりながら巨岩の基部につき、そこからＡｏで巨岩を乗越す。両岸の壁が一段と高くなり、赤茶けた岩壁が糸条の滝を無数に落としている。ここで行動食をとり、一本立てる。シャワーをあびながら岩壁の基部を上流に向かっていくと大滝と呼ばれる滝が大きな音をたてて水を落としている。左岸の岩壁をへつりながら滝の落口付近まで行き、そこでザイルを出し、右手のルンゼ状の所をシャワークライミングで登ると大滝落口に出る。なおも沢を詰めて行くと滝に行手をはばまれ、左岸のルンゼを登り大きく巻く。ルンゼを下降して谷に下ると、水晶谷出合である。ここからがいよいよ奥剣又谷へ入るのである。眼の前の 18ｍの直瀑が圧倒的である。この滝は登らずそれより下の左のルンゼに入る。このルンゼが悪く、神経を使う。ルンゼを登りきり右へ下ると谷へ降りることができ、最後の5ｍほどはアプザイレンする。なおも溯上を続けていくと口剣又谷出合に出る。ここにも 20ｍの直瀑があり、一旦口剣又谷へ入り、大きく巻く。ここで以外に時間がかかる。奥剣又谷へもどる少し手前に平らな所があり、ここを今日のキャンプサイトとする。沢の音を聞きながら飲む酒も、なかなかおつなものである。

5月 24日（くもりのち雨）　テント場（5：50）― 30ｍ大滝（7：00）―チョックストー

ン滝（9：30）　大峰縦走路（10：55）　弥仙（11：40～12：15）　一ノ峠（13：25）— 林道終点（15：30）　車デポ地（16：00）

今にも雨がふりそうな天気の中、出発する。すぐに 15 mの二条の滝が表われ、右岸を巻く。少し登って行くと谷が分かれ、左の本谷を行く。だんだん水流も少なくなり、ゴーロ状となって少し行くと美しいナメが表われ、なおも溯上して行くと 30 mの大滝が表れる。大変美しく、(2人)登攀意欲をそそられる。ザイルを出し、僕がトップで左岸を登る。途中で2本ハーケンを打つ。

次の滝もザイルを出して登り、その次の滝は右岸の草付と岩のミックスした所を　神経を使いながら登る。ここからは伏流となって小滝を二つ三つ越して行くと谷が分かれ、右の谷へ入る。ここからは側壁もだんだん立ってきて、谷というよりも、ルンゼといった感じである。驚いたことに、まだほんの少しだが雪がある所があった。さきほどから降ったりやんだりしていた雨も本格的に降り出したようである。ルンゼ状の所を詰めて行くと、大きなチョックストーン滝に行手をはばまれ、これ以上溯上することができないことを知る。ここから稜線に逃げることにし、山本さんが右岸のもろい所をトップで 20 mくらい登り、尾根へ逃げる。そこでザイルをはずす。後は強引にブッシュの中をこいで行くと、大峰縦走路に出る。あとは縦走路を弥仙、一ノ峠と経て、自動車がある小谷林道へ降りるのみである。

以上が今回の沢登りであるが、記憶力の悪い僕が書いたので、まちがっている所も　多々あると思います。詳しくは、大阪わらじの会が出されている　大峰の谷を見て下さい。

昭和56年度 スキー山行

比良・武奈岳スキーツアー

幸内義孝

昭和 56年1月 15日　　メンバー：新川，内藤，小林，国沢，大川，幸内

大阪（7：00）— リフト乗場（9：00）— 比良ロッジ（11：30）— 武奈岳頂上（14：30）— 比良ロッジ（16：00）— 比良駅（19：00）

朝早く起き、大阪駅に行く。新川さんと会う。昔々の出立ちである。比良駅に着くと、沢山のスキー客で一杯であった。バスは臨時があったので助かった。リフト乗場で2時間程待たされ、比良ロッジに着いたらもう昼だ。昼めしを食べ、早速武奈岳へと向かう。頂上はこれで3度目である。以前、田中さんと来て、コルへ下る時、道に迷ったことを思い出す。頂上からコルまで下り、ゆるやかな斜面をスキーをかついで登ると、あとはスキー場へ向かって一気に滑って行った。帰りもスキー客がリフト乗り場にどっと押し寄せ、長い行列であった。今日は、一日中待つばかりの印象であった。

氷の山スキーツアー（大段平コース）

小　林　利　樹

2月 28日（夜）～3月1日　　メンバー　国沢，川辺,(吉田，津川）小林

2月 28日夜から野上氏一行（6人）と車で氷の山スキーツアーに出かける。先発で星野さん達が分廻しコースへ行っている。奈良尾で車を止めて今日のねぐら?!　東尾根の避難小屋へ僕等一行5人で出発する。野上氏一行は車中泊、東尾根避難小屋で会いましょうとわかれる。小屋には先客（1人）がいる。ツエルトをはりウイスキーでちびりちびりとやる。

3月1日　この小屋で野上氏一行を待つので割合ゆっくりできる。6時頃外に出ると雪が降っている。視界悪し。7時頃野上氏一行が到着。少し休憩してシールをつけて氷ノ山へと歩を進める。 10人以上の大パーティーである。初めてシールをつけた人もいたので　前後2パーティーに分かれての行動になってしまう。頂上で1時間近くスキー練習をする。ガスの中、神大ヒユッテめざして滑降の始まりである。全員大段平コースを行く予定であったが　始めて山スキーをした人もいたので野上氏一行は東尾根下山、僕等は大段平コースへと神大ヒュッテで分かれる。神大ヒュッテ前で神大の学生6～7人がジャンプして遊んでいるので僕等も一緒になって遊ぶ。

雪が表面だけクラストしているので大変滑りにくい。エッジがすぐにひっかかってしまう。けれども傾斜もゆるくツアーコースにはもってこいの所である。大段平の末端からは5m位きつい所があるが問題はなく落ちてもすぐに止まるだろう。このあとはほとんど尾根通しに滑っていく。安井峠を正面に見えるあたりの枝尾根を下るとよい。手前にもよく似た尾根がある。

大阪府岳連の人がこのコースの下見にきていた。夫婦である。非常に安定した滑り方である。この尾根はブッシュが少し多く回転するには少し問題がある。

あとは林道を直滑行でゆくと安井の部落へ到着である。途中、僕と吉田さんが早く降りて車をとりにいく。バス停で全員車に乗り一路帰神する。

伊吹山スキーツアー（往復）

小　林　利　樹

3月7日　　メンバー　　堀田，（吉田），小林

伊吹山へスキーへ行こうと3人で出発する。

土曜日にもかかわらずスキー客が大変多い。リフトで3合目まで登り朝飯を食べてシールをつけ出発する。今日は大変天気がよくものすごく暑い。

9合目までシールをつけて登るが、ここからは傾斜も強くなってくるので板を脱いでツボ足で上る。頂上直下で会社の人に会う。大和武尊の所で一服。ここから板をはきいよいよ大滑降である。頂上付近はクラストしているのでエッヂがあまりきかない。直下の所は傾斜が強く横滑りで少し降りる。途中からはおもいおもいのシュプールをえがきながらスキー場目指して滑ってゆく。ザラメ雪なのであまりスピードが出ないのが災いである。林道を滑ってリフト下まで行く。大変おもしろかった。

白馬岳スキーツアー

小林利樹

3月21日～22日　　メンバー：（吉田）　小林

3月21日　この栂池は今年度の冬大量遭難があり、すごく有名になった所である。補導員の人が念入りに入山者のチエックを行なっていた。

今日は幸い高曇りではあるが雪は降っていなかった。しかし1～2日したら又降るだろうとのことであった。風もなく視界が少し悪いが　まあツアーにはさしつかえはないだろう。栂池の終点までリフトに乗るが、ここのリフトは少し高い。

栂池山荘で朝食をとる。ここから天狗原を目指しシールをきかせながら登っていく。雪がウインドクラストしているのでシールが快適にはきいてくれない。

天狗原ではスキーヤーや登山者が数多くいた。ここから乗鞍岳目指し歩を進める。頂上でスキー板をデポして白馬大池へと降りてゆく。ここの登山道は割合風が強いらしく　夏道が所々出ていた。

白馬大池は一面雪原となっている。小蓮華岳の斜面はスキーにはよい所だろう。三国境、白馬岳へとゆく。信州側にすっぱりと切れ落ちている白馬岳主稜は圧巻である。時間もまだ14時位だし、今日中に下に降りれるので急いで下る。

乗鞍岳からスキーをつけ快適に滑る。ゲレンデで暗くなりヘッドランプでゲレンデを滑る。19時ゲレンデ下につき急いでタクシーに乗り駅まで行く。

ささやかながらスキーでのかもしか山行であった。

例　会　報　告

（昭和56年度 1月～6月）

1月11日	新年会		
17日 18日	八ケ岳	（山本）	列車不通のため中止
25日	有馬沢登り＋保塁ＲＣＴ	（堀田）	
2月 1日	名色－蘇武岳スキー	（幸内），	山本，星野
8日	有馬沢登り＋保塁ＲＣＴ	（小林），	内藤
15日	妙見，蘇武岳スキー	（川辺），	国沢
22日	西多紀アルプス	（山本），	木村，幸内
3月 1日	氷ノ山スキー	（星野），	山本，堀田，山内
8日	西山谷－保塁ＲＣＴ	（堀田），	内藤，川辺
15日	妙号岩ＲＣＴ	（山内），	小林，川辺，堀田，星野
20日 22日	氷ノ山－扇ノ山スキー	（山本）	参加者なし
29日	不動岩ＲＣＴ	（堀田）	
4月 5日	逢来峡	（堀田）	参加者なし
12日	不動岩ＲＣＴ	（山本），	星野，矢木，堀田，山内，国沢
19日	大月地獄谷	（萩本）	参加者なし
26日	保塁岩ＲＣＴ	（国沢），	野上，星野，山本，堀田，山内，三原鍛冶
5月10日	総　会		
17日	ファミリーハイク	（堀田），	木村ファミリー，岸本，川辺，山内
24日	白川又川本流－奥剣又谷	（山内），	星野，山本
31日	妙号岩ＲＣＴ	（小林），	星野，山本，堀田，野上，萩本，国沢，久村，南，吉田
6月 7日	保塁岩ＲＣＴ	（矢木），	内藤，星野，小林，堀田，山内，三原鍛冶，萩本，南，国沢，久村
14日	不動岩ＲＣＴ	（川辺），	山内
21日	小豆島ＲＣＴ	（星野），	小林，川辺，堀田，山内，吉田，三原鍛冶，国沢，久村
28日	百丈岩＋不動岩ＲＣＴ	（堀田），	星野，山本，山内，吉田，小西

（　）内は当番

（例会報告）

名色・蘇武岳スキーツアー

幸内義孝

1月31日～2月1日　　メンバー　　幸内，星野夫妻，山本

山本氏も少しはうまくなったろう。でもひざをネンザしてしまった。スキーでのひざのネンザは気をつけよう。一日中快晴で気持ちの良い日であった。次の日、星野夫妻が来た。蘇武岳へ行ったが、天気が悪く何度もルートからはずれてしまいそうだった。8時に名色スキー場を発って頂上に11時半に着いた。寒くて、すぐに下ってしまった。スキー場に着いたのは午後の3時であった。久々の山であったが楽しかった。

（例会報告）

妙見山から蘇武岳縦走

川辺秀司

2月15日　椿色（1：00）　日畑（2：00）　妙見部落（1：00）　妙見峠（1：00）　北村台（2：00）　金山峠（2：00）　蘇武岳（2：30）　名色

但馬をめぐる山々の代表的なスキー縦走のコースとして　氷ノ山，鉢伏山周辺についで、この蘇武，妙見のコースが挙げられよう。

八鹿から　タクシーで椿色まではいって、小佐川の右手支流に沿って歩き、日畑手前の道端でテントを張る。

日畑から、スキーをはき川沿いにそって歩くと尾根に取りつく。この道は、名草神社の表参道であるため踏み跡もあり、スキーのトレースもあった。

2時間ほどで、ジグザグに登っていた道も終わり、広い視界の中に妙見杉に囲まれた妙見部落が見える。

部落には、数軒の民家がひっそりとたたずんでいた。この少し上には、名草神社があり、ここの三重の塔は国宝に指定されている。また、境内には樹齢1500年といわれる夫婦杉が　天を突いてそそりたっていた。

境内を通って妙見杉の樹林帯の中の道を登ると1時間程で妙見峠にでる。目の前に広がる氷ノ山，鉢伏山の展望はすばらしい眺めである。これを左に見ながら稜線を行くと、少し広いピーク北村台につく。はるかかなたに蘇武岳が見える。

少し下ってから東鉢伏山の登りとなり、ここから金山峠への滑降となる。金山峠で少し林道を歩き、蘇武岳への尾根に取り付く。

ゆるやかな登りを稜線上に進むと蘇武岳の頂上だった。

（例会報告）

西多紀アルプス

木　村　寅次郎

昭和56年1月22日　　パーティ：木村，幸内，山本

1月22日（曇）　篠山口（8：40）―佐仲ダム（9：15）―佐仲峠（9：45）―三尾山（10：20～11：00）―鏡峠（12：00～13：00）―滝谷山（15：00～15：15）―東鏡峠（17：00）　高坂（17：30）―垣屋 ― 篠山口

宝塚駅より幸内君と小生、三田駅より山本君が乗車し、福知山線は日曜日でも冬の閑散期の故か案外空席があり、ローカル線特有ののんびりムードの車中風景が見られ、互いの談話の中に篠山口駅に着き、灰色の空を仰ぎながら直ちに予約のハイヤーに乗り佐仲ダム前で下車、ダムの水面には薄氷が見られる程度でさほど寒さも感じられず、いよいよ今日のコースを歩き始める。

少しづつ高度を上げ、佐仲峠近くからは日陰に少し残雪がそこかしこに見られ、空模様も少し青空が仰がれる位になり、三尾山頂に10時20分着、丹波の山なみを望みながら小憩する。三尾山頂には「三尾城址」の石標があり、戦国時代の武将・豪族の往来がありさぞや「山岳城」としての偉容を誇ったであろうかと想像される堅固な砦であることがうかがわれる。南に多紀郡、北に氷上郡が一望される唯一の展望台の感がする。東に伸びる稜線の上り下りを繰り返す中に、氷上側（春日町）の山襞に立つ岩峯が数か所あり、若い岳人（岩男）の闘志を誘う格好の岩場が見られ、若い二人は如何にも挑戦したい様に思われた。稜線を歩くうちブッシュ漕ぎがしばらくつづき鏡峠に12時着。残雪を集めラジュースで熱いコーヒーを頂き、山の話に花を咲かせつゝ昼食を摂る。この鏡峠は往時は氷上郡（ごおり）と多紀郡（ごおり）の唯一の最短連絡路の様に思えて、当時の武士・農人の姿が偲ばれる所でした。午後は又々稜線上をアップ・ダウンを重ねる中に東鏡峠に17時着。それより南へ一気に下り、高坂部落に17時30分着。しばらく待つ中に定期路線バスに乗る。車中より今日一日歩いた郡境の稜線が黒く染まり、よい想い出の山歩きの感慨にひたりながら篠山口駅前着。駅前の食堂で軽い夕食をとり篠山口駅発19時05分に乗車して、一同帰路に着き、三田駅・宝塚駅にて再会を約し別れる。

冬枯れの丹波の山々は踏み入る人も少なく、軽い気持ちで手軽に歩ける格好の山歩きの所の感じで一人歩きもたのしめる良い山々と思いました。

熟年の小生ながら若い二人のお誘いで同行出来ましたことを心より喜んでおります。紙上をかりてお礼申し上げます。

昭和55年度 個人山行

編集者の手落ちにより前会報No. 11に掲載出来なかったものを、こゝに掲載致します。

氷ノ山，千谷（積雪期）

米 沢 典 之

春米（つくよね）なる優しい地名を身にしみて感じたのは、昭和54年10月下旬に会員の宮松と米沢が風雨の氷の山を小豆ころがしから登った時、氷の山越えで標識を見た時である。

翌55年2月11日、憧れの春米に入り無名尾根を試登したが、深雪とブッシュにはばまれ退却、ようやくスキー場の下まで帰った時、天候が回復して氷の山の西面の全容を見ることが出来た。二の丸方面から見る女性的な感じと全く異なりアルペン的というか豪快そのもので、殊に頂上へ真直ぐに突き上げる千谷がその感を強調していた。

2月24日　リフトを使用して、わさび谷 — わさび谷の頭 — 頂上往復　左右の谷よりデブリを見る。同行の玉井プロに雪崩の見分け方を教わる。

3月16日　再び宮松，米沢で春米に入るも、雪状からして千谷は危険と感じ、氷の山越より県境稜線 — 頂上往復

3月20日　宮松，米沢の三度目の春米入り。リフトを利用、終点より左（北々東）へ約300m、浅い溝を越え、杉林を抜け、千谷の沢身に下りる。左岸に沿いしばらく行くと右から一本沢が流れているのを飛び越え左岸を登る。このあたりに夏道があるのか古い標識を一本見る。沢がせばまり谷芯を通る。ほとんどデブリの上を歩いている感じ。ぐんぐん高度をかせぐ内に正面に黒い大きな岩が現れ右から巻いて上部に出る。滝場のような感じの所で雪も膝から腰に達する。左右の枝沢は全てデブリを押しているが特に左岸からは大きなものが出ていたし、特に一本、なお危険を感じる沢があった。時には胸まで落ち込んだこともあったがやはり小さな滝場の上を通っていたかも知れない。傾斜が一層急になる頃谷は二つに分かれ右正面の明るい広い谷が県境稜線に突き上げている。一見容易なルートに感じられたが雪状をみて雪崩誘発の危険があったので左手の小さな方（登頂後、この谷は頂上から南、二の丸寄りに突上げていた。）の沢を見たがこれも同様。相談の結果、間のブナが疎生している屋根にとりつく。屋根というより雪壁といった感じ。念のため新雪を除いてみると根雪にクラックが生じている。こゝでブナを頼りにアンザイレ

ンし、宮松をトップに4～5ピッチ押し上げるとブナが終わりブッシュとなるとともに傾斜が緩やかになる。谷に入ってから連続した緊張から解放されほっとすると、右手に二の丸、左手にこしき岩、正面に黄と赤の尼高の小屋が見え、始めて氷の山へ直登したことを知る。二人合わせて100才のロートルパーティの苦闘も終わり、ザイルをしまって小屋の真裏から頂上に立った。帰路は、わさび谷を考えたが、氷の山越えを経由、道祖神にお礼を申して春米に下った。

2月24日　わさび谷

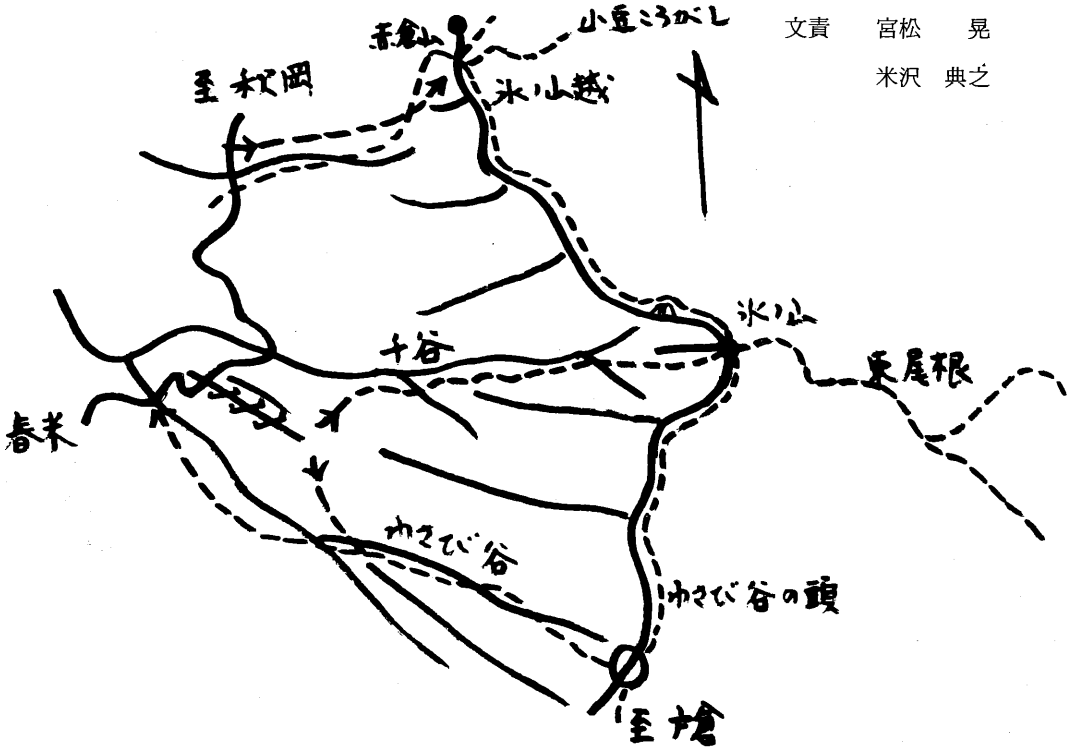
リフト終点（8：10）－わさび谷の頭（12：00）－ 氷の山（13：30～14：00）－ わさび谷の頭（15：00）－春米（17：30）

3月16日　氷の山越

春米　モリス荘発（7：50）－氷の山越（10：00）－ 氷の山頂上着（11：20）－ 氷の山頂上発（12：50）－ 氷の山越着（13：40）－ 春米モリス荘着（14：45）

千谷

リフト終点（8：45）－千谷入口（9：00）－ 黒い岩の前（11：00）－ 頂上着（13：15）頂上発（13：35）－ 氷の山越着（14：20）－ 氷の山越発（15：00）－ モリス荘（15：45）



文責　宮松　晃
米沢　典之

（屏風岩登攀記）

雲稜ルート

小　林　利　樹

昭和55年9月21日～22日　　パーティ：小林，川辺

9月20日、いつものように「ちくま3号」に、今回の同行者川辺さんと乗り込む。

松本からタクシーで上高地へと行く。連休でもあるので大勢の人がいる。

朝飯を食べて一路横尾へと歩く。はやく行って少しでも前へと急ぐ。徳沢で少し休み、すぐに横尾へと行く。横尾でキジ射ちをして横尾の河原をゆく。河原に出ると目ざす屏風岩が目に飛びこんでくる。対岸に渡り1ルンゼ押し出しをあえいで登る。T4尾根取付では10人位の人が順番を待っている。これらの人は横尾位にテントを張っている人だろう。

少し時間は早いが（11時頃）昼食をとることにする。T4尾根自体も四級もあるので気の抜けない所である。この尾根の下に割れたヘルメットが一つ、遭難者のものか？　2ピッチ程スタカットで登り　以後コンテで進む。前のパーティが少し遅いようだ。T4でも約1時間近く待たされる。やっと自分達の順番がきたので取り付く。T4からの1ピッチ目の凹角は草付のフェースを少し登り　左側のコンタクトラインをハング下まで登っていく。ハング下から少し登るとテラスがあり、右上にピナクルが出てくる。ここから少し傾斜もゆるくバンド状のフェースを行くともうすぐ扇岩がある。この扇岩でも先行パーティがあるのでこのテラスで順番がくるまでのんびりと待つことにする。先行パーティの女の子がトップで登っていたが、ハーケンが抜けたらしく約5メートル程落ちる。この事故を下で見ていたのでびっくりした。このパーティの女の子が足をネンザしたらしく下降をする。ここで約2時間近く待っていた。僕等の前のパーティが取り付き、僕等が取り付いたのは5時であった。あとのパーティはこのテラスでビバークするらしい。雲ゆきも悪く雨が降ってきそうだ。テラスからの人工はボルトがいたんでいたり、リングのかわりに靴ひも等で代用してあるので悪く緊張させられてしまう。東壁ルンゼに入る所から雨が降ってきてフリクションで登るのに少し緊張する。夕闇も降りてきたのでヘッドランプを出しての登攀である。ホールドをさがすのに苦労する。草付混りのスラブで先行パーティのセカンドの人がスリップする。僕の目の前まで落ちてくる。今回はよく人が落ちるなあ！　やっと上部のブッシュ帯に入って登攀終了である。

ここから屏風の頭まで長い道のりである。雨もしだいに強くなってきてだいぶぬれてしまう。屏風の頭でビバークをする。風雨強くツエルトが飛びそうだ。全身びしょぬれになる。明日は前穂北壁へ行く予定だがカットをしてパノラマコースを下山に決定。しかし下まで来ると晴れてきて残念であった。

1　ルンゼ

小林利樹

昭和55年10月10日～12日

パーティ：小林,(吉田)

10月9日　今回もいつものように「ちくま3号」で一路松本へと向かう。

同伴者は会社の同僚の吉田さんである。3連休でもあるので列車は満席である。

10月10日、松本駅からタクシーで行こうかと思ったが、あまりにも人数が多く、時間待ちが2時間近くもあるので、松電でいくことにする。けれども新島々でもバス待ちの人が多く、1時間近くも待たされる。

上高地へ着いたのも大分遅くなってからであった。横尾へと歩を進める。

河原まで来ると目指す屏風岩が見えてくる。3週間前に川辺さんと来た屏風へまた来てしまった。今回の登攀は1ルンゼである。屏風岩で最初に拓かれた古典的ルートであるので、トレースしたい所である。

1ルンゼ押し出しはやはりしんどい。取付でアンザイレンをする。前回きた時と同様に順番待ちの人が多くいる。1ルンゼ取付は誰もいないのでよかったが、しかし1ピッチ登るといるいる大人数である。このルンゼは落石が多く気が抜けない。ルンゼ左側のスラブを登る。フリクションがよくきく所である。

少し行くとスラブから曲がった大きなクラックが出てくるが、見た目よりもやさしい。この辺からルンゼは狭くなり、チョック・ストーンを越える。ここで先行パーティーの人が登れず（セカンド）苦労している。その間ずっと待たされる。もう少しゲレンデで練習をしてから来るとよいのだが。こういった人気ルートは誰でも行きたいらしく、時間待ちで泣かされてしまう。この辺は内面登攀が楽しめる所である。凹角内の登りがずっと続く。最後はチムニー状となっている。最後の核心部手前で先行パーティーのセカンドを抜いて登っていくと、テラスで先行パーティーのトップの人がテラスをあけてくれないので、狭い所に立ってビレーをする。この頃から雨が強く降りだした。　この時、上部で落石があったらしく石が多く落ちてくる。ここまでくると傾斜もゆるんで広いスラブ帯になる。浮石が多い上に雨でぬれているので　スリップに注意しながらコンテでゆく。

屏風尾根手前2ピッチの所にいるパーティーが　ずっと同じ所にいるので変だなあと話していると、上部からの落石で先行パーティーの人が落ちたので　救助を手伝って欲しいとのことであった。落石に当たり10m位の転落であると言っている。4人で救助の始まりである。最後の2ピッチは雨でぬれてスリップしやすい上に岩がもろいので　右手へトラバース用にフィックザイ

ルをはる。

ケガをした人は、ヘルメットは割れて頭と首と口から血を出していた。足も骨が折れているかも知れない。しかし気持ちだけは気丈である。時間待ちで待たされているので、時間も大分遅い。屏風尾根までフィックスをはり無事到着する。もうあたりは真暗である。荷物をみんなで分担する。足が痛いらしく大変つらそうである。屏風の頭までが大変長く感じる。頭から涸沢へも大分時間がかかったがなんとか涸沢へ着いた。風雨強くずぶぬれである。

ここで負傷者パーティは泊まるのだけれども満員である。今日中に下まで降りた方が足もよいのではと言うが、もう痛くて歩けないとのこと。しかし一日寝るとよけいに足が痛くなるのではと言っても、小屋について気持ちが抜けているらしく元気が急になくなってきたようだ。

ここで僕等は、雨が強くなってきているが横尾まで帰る。 24時着。

10月 11日　今日もまだ昨日の雨が残っているので登攀はやめて帰路につく。途中、横尾の岩小屋付近で植原氏と会う。一人で来ているとのことであった。8時すぎから雨が降ってきてずぶぬれで上高地へ着く。

〝梅雨の山〟

内藤正司

梅雨の山には臭いがある
霧雨が山を包み
つかの間の青空に
緑り濃い山が
身近にせまり寄ってくる
梅雨の山には
人の心に入り込んでくる
不思議なロマンがある
そんな梅雨の山に
私は一人で登ってみたい

会　員　動　静

住所変更

幸内　義孝	伊丹市野間字畠中240−10	電話番号の変更はありません。
国沢　昭美	神戸市垂水区富士見が丘1丁目10−12	（078）994−9627

昭和56年度総会において復活会員となられた米沢典之氏から入会所感が寄せられましたのでここに掲載致します。

神戸山岳会再入会所感

この度、前田浩様の紹介で神戸山岳会に再入会させて戴きましたことを厚く御礼申し上げます。

53才近くになるロートル。心臓が悪く、足腰も萎えた者が何故に復活を願ったか、その心を申し述べます。昨秋、白出沢〜奥穂〜西穂〜新穂高を両夜行、1泊2日で登りました時のペースは、殆んど空荷で　1時間　200mです。しかも2,500m以上になりますと、ブレーキがかかって来ます。昨春5月2日〜3日、北岳（新雪膝迄）の時も同様でした。従って、若い方々と一緒になる事は遠慮すべきと考えております。人が一歩の所を2歩かゝり、一歩が歩けなければ半歩ずつ、半歩が出なければ這ってでもとりついた有様です。そのため殆んど単独行をしていますが、登山届にはついつい所属並びに連絡先に神戸山岳会と書いて来ました。これではあまりにも申し訳無き事と思いつめ、復活入会願った次第です。年をとって来ましても、山に対する気持ちはますます深く、もはや自分自身の一部です。残念な事には、私の息子が中学入試のため今後1年8カ月間は日曜日も勉強につきっきりになり、例会には参加出来ません。そんな私でも何か会の為にお役に立てる事があるかも知れませんので、適当におっしゃって下されば幸甚です。例会の案内は診療室の机の上に置いて毎日読んで楽しみにしております。もしか、ある日、例え一時間でもひよっこり顔を出すような事がありましたら、その節はよろしくお願い申し上げます。

昭和56年6月20日　　米沢典之

編　集　後　記

今回の会報は、昭和56年1月〜5月までの山行を掲載しました。会員の山行記録のみにとどまらずバラエティーに富んだ会報の編集を心がけていきたいと思っています。

神戸山岳会・会報　No. 12

昭和 56年 10月　発行

編集者　山本泰彦・堀田　久・国沢昭美

発行者　神戸山岳会

神戸市中央区中山手通1丁目6の21

（前田　浩方）

印刷所　神戸市中央区北長狭通4丁目私学会館内

甲南出版社